

# イギリス、ノッティンガムでの 1 年

土井 晶子 神戸学院大学心理学部

Akiko Doi (Department of Psychology, Kobe Gakuin University)

Kobe Gakuin University Journal of Psychology

2020, Vol.2, No.2, pp.103-108

## I. はじめに

2018 年 9 月 11 日から 2019 年 9 月 11 日まで、イギリスの the University of Nottingham (ノッティンガム大学) の Visiting Academic として受け入れていただいた。所属先は School of Education で、先方のホストは Dr. David Murphy (Associate Professor, School of Education) である。

ノッティンガムはイングランド中部、ノッティンガムシャーにあり、人口は約 28 万人 (うち約 10% が学生) でイングランドでは 27 位の中規模の自治体である。ユーロスターも発着するロンドンの St. Pancras International 駅から East Midlands Railway の電車で約 2 時間の距離に位置

する。ロビン・フッド伝説の町で、ノッティンガム城の前にはロビン・フッドの像があり、郊外にはシャーウッドの森もある。なおノッティンガム城は 2020 年秋まで改装工事中であり、私の滞在中はずっと閉鎖されていた。図 1 はノッティンガム城の前のロビン・フッド像である。



図 1 ロビン・フッド像

## II. ノッティンガム大学について

ノッティンガム大学は 1881 年創立、学生数約 3 万人の総合大学 (文系, 理系, 医学, 看護から芸術系まで) である。イギリスの研究型大学 24 校からなる Russel Group の一員であり、様々な大学ランキングにおい

てイギリス国内では 20 位前後、世界ランキングでは 100-150 位に位置する。イギリスの大学では初めて中国 (寧波)、マレーシアに分校を設立した大学でもある。University Park Campus, Jubilee Campus, Sutton Bonington Campus の 3 つがあり、School of Education は Jubilee Campus にある。University Park と Jubilee Campus はノッティンガム中心部からバスでそれぞれ 20 分、10 分程度、Sutton Bonington は少し離れて 40 分程度である。キャンパス間は Hopper Bus という無料の巡回バスが走っている。

メインキャンパスは University Park Campus であり、大半の学部はここにある。ドラッグストアの Boots 創業者の Sir. Jessie Boots が所有していた広大な土地を寄付したもので、地元住民にも開放すること、という条件がついているため、近所の人たちがよく犬の散歩などをさせている。Student Union の大きな建物もあり、フードコート (中華, ピザ, メキシカン, スターバックス等)、書店、文具店、理容室、ドラッグストア、スーパーなどの生活に必要な施設、その他、チャペル、バー (イギリスは 18 歳から飲酒可能なため、学内のあちこちにバーがあり、学内のスーパーではちょっと驚くような売り場面積で酒類を販売している)、印刷ショップ、スタジオなど学生生活をサポートする多くの施設が入っている。図 2 は University Park の Student Union が入っている Portland Building で、この構図はよく大学案内の表紙に使われている。

Jubilee Campus は 2000 年にバイク工場の跡地にオープンした。こちらは有名建築家の手になるユニークな造形の建物が多く、このキャンパスの建築物の見学ツアーなども時々開催されている。こちらは教育施設としては School of Education, School of Business, Computer Science と孔子学院、そして Innovation Park という研究施設群がある。なお Sutton Bonington には獣医学部があるが遠いので行ったこと



図 2 Portland Building

はない。

Jubilee は University Park に比べるとこじんまりしているが、学内に池や川、噴水があり、いつもたくさんのカナダ・グースが我が物顔に闊歩しているのどかな場所である。池の向こうには立派な宿泊設備もある Conference Center があり、院生全員が参加する Encounter Group の際にはその会議室を使用した。図 3 はキャンパス内で見かけるカナダ・グース、図 4 は Jubilee Campus の Conference Center から見た School of Education と図書館である。

School of Education の Visiting academic としては私以外に 3 ヶ月、1 ヶ月という短期の研究者が入れ替わり立ち替わり来ていたが、私以外は教科教育の専門家であった。Visiting Academic 専用の共用オフィスに一人ずつデスクと PC が与えられ、図書館の利用は自由、共用のプリンタとコピー、スキャナも自由に利用できた。

### Ⅲ. ノッティンガム大学大学院 (MA Person-Centred Experiential Counselling and Psychotherapy Practice) の授業

9 月 12 日にノッティンガムに入り、最初の 3 ヶ月は学内の accommodation (Studio タイプ。いわゆるワ

ンルーム。ちなみに家賃、光熱費、住民税込みで約 10 万円/月) に滞在、その後は市の中心部の 1 bed room (いわゆる 1LDK) のフラットを借りて住んでいた。図 5 は最初に住んでいた学内の accommodation である。建物の外観は派手だが、室内は拍子抜けするくらい普通である。Studio だけでなく家族で滞在できる広めの部屋もあり、全部でこの建物には 7 室あった。共用のリビングルーム (TV がある)、洗濯室 (洗濯機と乾燥機あり。しかし洗濯機が滞在中に壊れて 2 週間くらい使えず。室内の暖房も一度壊れて 3 日間くらい直らなかつたり、とにかくイギリスではいろいろ壊れるのに悩まされた) があった。ヨーロッパの常としてバスタブがなく電話ボックスサイズのシャワーのみで、さすがに 3 ヶ月いるとちょっとつらくなり、バスタブ有りを条件にしてフラットを探した。

授業は 9 月の最終週から授業が始まった。1 コマ 4 時間 (13:30 ~ 17:30)、半期 11 週である。秋学期は 12 月はじめで終了、その後、1 月最終週まで 6 週間くらい冬休み (学部生はこの間に試験がある)、春学期は 1 月末から 4 月中旬までであった (春学期の終了時期は、その年のイースターにより変動する。2019 年はイースターが 4 月後半と遅かったため、春学期中にイースター休暇がなく終了がその分早かった)。私は大学院 (Person-Centred Experiential Counselling and Psychotherapy Practice MA: MAPCEPP) の授業にオブザーバーとしてずっと参加させていだいた。

ノッティンガム大学のこの大学院のコースは、Person-Centred Approach に特化したカウンセラーの養成コースである。通常、イギリスの修士課程は 1 年だが、ここでは実習と修論が課されていることもあり、修業年限は 2 年 (part-time いわゆる長期履修は 4 年) となっている。2 年目に主として成人を対象とするか (Adults across the lifespan pathway)、子どもを



図 3 Jubilee Campus のカナダ・グース



図 4 Conference Center からの眺め



図 5 学内 accommodation: Xu Yafen Building

対象とするか (Children and young people pathway) に分かれる。2年目には外部実習 (Placement: 実習を placement と呼ぶのはイギリス英語で、最初は何の話をしているんだろう、と理解できなかった) を100時間行う。日本のシステムと異なり、client-contact hour を100時間という規定で、実際に面接を行った時間しかカウントされない。そのため、クライアントがキャンセルした場合はノーカウント、日本だと実習と見なされる電話当番や陪席などもカウントされない。

子ども対象コースの学生は学校などで、成人対象コースの学生は大学の Human Flourishing Project の一環である Research Clinic で実習を行っている。この Research Clinic はノッティンガムの City Centre (中心部) の建物の一室であり、日本の大学院の附属心理相談室とほぼ同じシステムで運営されている。ただし「研究目的」であることを明示し、相談を無料にする代わりに全ケースについて定期的に関係認知目録など Th-CI 関係を測定する質問紙調査などを行っている。また院生はこれ以外にも外部のトラウマセンターなど Placement partner での実習も可能である。担当ケースについては5回に一回、SV が受けられる。Research Clinic および Placement partner の組織での実習についての SV は無料である。

修了すれば自動的に Person-Centered Approach のカウンセラーとして認定される。試験などはない。BACP (British Association for Counseling and Psychotherapy) 認定のカウンセラーなどの資格を得たい場合は別途その団体による試験がある。

授業は火曜と水曜に1コマずつであるため日本よりも科目数は少ない。1年目は Developing Person-Centred Experiential Theory, Developing Professional Practice and Skills, Advancing Professional Practice and Skills, Advancing Person-Centred Experiential Theory の4つの module (=科目) を学期に2コマずつ全員が履修し、2年生では Dissertation and Research Method (修論: 通年クラス) は全員が受講し、成人対象コースの学生は Power, Politics and the Socio-Cultural World を、子ども対象コースの学生は The Lives of Children and Young People: Systems, Contexts and Approaches を受講する。

各 module の評価は授業での様子に加え、term paper や process report (授業や weekend process group での自分の体験の振り返り)、book review などの writing の課題から評価される。Writing はどれも 3000words から長いものでは 6000words とかなりの分量である。1割程度の学生が単位が取れず、再履修となっていた。なお、2度目も不合格となると修了はできず、修士号は取れないが、1年は学修したということで Diploma が取得できる場合もあるという。

これらのレギュラーの授業に加え、学期ごとに全員が参加する Community Group が2回ずつと、M1、

M2 混合で小グループに分かれ、週末2日間に集中的 Encounter Group を行うという Weekend Process Group が各学期1回ずつあり、私も参加した。また、4月はじめに4日間連続で、スコットランドの University of Strathclyde の Dr. Robert Elliot を招いて、Emotion-Focused Therapy の Level 1 のコースが希望者を対象に開催され、私も参加した。1週間の時間割を付録として末尾に添付する。

イギリスの大学はほとんどが国立で、以前は学費は無料だったとのことだが、政府の教育予算の削減に伴って学費の支払いが必要となった。ノッティンガム大学のこのコースでは、2019年現在、学費は年間8,010ポンド(約120万円)であるが、これはイギリスおよびEU出身者の学費であり、それ以外の International Student は19,170ポンド(約280万円)となり、scholarship などの funding も多少あるとはいえかなり高額である。加えて、トレーニングの一環として個人カウンセリングを受ける必要があり、この費用として追加で2,500ポンド(約36万円)ほど必要である、と大学のサイトに明記されている。なお、日本人対象の Japan Masters Scholarship があるが、学費の25%しか補填されない。

私は火曜日はM1のTheoryのクラス、水曜はM2のDissertationのクラスに秋学期・春学期ともに参加した。このコースの大きな特徴が、「すべての授業が Encounter-group 形式で行われる」ということで、それを体験することができたのは幸運であった。

Encounter-group 形式の授業では、まず教員は基本的に教えず、あくまでもファシリテーター役として参加する。どのようにこの時間を使っていきたいかは学生がすべて話し合っ決めていく。その際には「決める」という目的にたどり着くまでの戸惑いや、お互いの意見の対立、お互いに対する要望、など様々な気持ちや意見も表明される。M1は25名、M2は14名ほどいたが、授業は円形に並べた椅子に全員が座り、ずっと話し合ったり、気持ちを打ち明けたり、ということが続いていく。Encounter Group は Rogers, C.R. が特に晩年に注力していた自己理解・他者理解のためのグループ・アプローチであり、まさにそのアプローチをそのまま、学習とカウンセラーになるための自己理解に活用するというかなり思い切ったカリキュラムである。

また、このグループでのやりとりを通じて、「きちんと聴く」とはどういうことか、自己一致や共感的理解とは実際にどのような体験なのか、をただ言葉として理解するのではなく、まさにリアルに自分たちの体験を通じて学び、身につけていく。当然、対立や葛藤、メンバーに対する反発なども起こってくるが、それをグループ内でどのように抱えていくかについても体験することになる。すべてリアルな「今ここ」の自分がぶつかり合う体験であるため、ロールプレイなどより見ようによっては相当に厳しい。

そのため、合わない、あるいは「まだ自分は準備ができていない／自分には早すぎる」といって辞めていく学生も少数であるが毎年存在する。

このような形式で修論のクラス（いわゆるゼミのようなもの）をどうするのか、とっていたが、やはりゼミをどう運営したいか、どのようなことを学びたいか（研究方法など）、などを学生が話し合うことから始まっていた。ここでも教員はファシリテーター役であるが、学生のテーマを聞いて、どのような手法でのアプローチが可能かなど、修論作成に対するアドバイスは随時行われていた。しかし、研究手法については、学生が「これを学びたいので、誰か専門の先生にレクチャーしてほしい」という要望が明確に出るまで、教員の方からあれこれ提供することは避けられていた。

修論クラスが従来型のゼミとどう違うかだが、気づいた点が二つある。まず私が参加していた学年では、教員があまり教えなくても、学生同士が互いに教えあい、学びあう風土が醸成されていた（Rogers と Freiberg が *Freedom to Learn* (1969) で述べていたとおりである）。驚いたのは、個人指導が通年で2～3回、各1時間くらいしかないのに修論が書けることである。それもM2の最初の時点ではほとんどの学生が「統計が全然分からない」「どんな手法でまとめていいのかわからない」という（日本の院生とほぼ同じ）レベルなのに、である。最後の授業で院生にどうなっているのか質問したところ、WhatsApp (LINEのようなチャットアプリ) でグループを作り、毎晩そこで遅くまで質問が飛び交っているということであった。また、学部までは「他人を助けると自分が損をする」という考えだったが、ここに来てそれが変わった、助け合う方が自分にとってプラスになることに気づいた、とのことである。これもM1からずっとこのEncounter group形式の授業でお互いに正直に話し合いを続けてきた成果であろう。

もう一つの違いは、研究での困ったことだけでなく、論文を書く上での不安、うまく進まないことへの心配、なかなか手をつけられない自分への歯がゆさ、などの「修論作成にあたってのすべての気持ち」が毎回、授業の初めに取り上げられ、それをお互いに聞きあい、分かち合うというプロセス（この気持ちについて語り合う時間はChecking-inと呼ばれていた）が展開していたことである。中間報告の時も、「自分は人前で発表するのがとても苦手で怖い」と半泣きで語る学生に対して、教員も学生もその不安を受け止め、みんなで「どうすれば少しでも気が楽になるか」が話し合われるなど、従来型のゼミでは表面化されない不安や心配、また喜びや充実感などが授業の重要な一部として語られる時間が必ずもたれていた。結果、この時間とメンバーが「自分を支えてくれている」という実感を学生が共有しており、非常にサポートティブな雰囲気醸成されていた。

私自身は、M1のクラスではあまり出番がなかったが、M2の修論クラスではセラピストEXPスケールを使った研究をする院生がおり、EXPスケール評価は複数名で行う必要があるため、interraterとしてこの院生に協力することとなった。これをきっかけに一緒に食事に行ったり話したりする関係になれたのは幸いであった。

授業に参加したあとは毎回、スタッフミーティングがあり、その日の大学院の授業担当者全員が集まる。私も参加を許されてその場を体験することができた。毎回意見を求められるのは大変だったが、教員同士もPerson-centredの集まりにふさわしく、自分のクラス運営で困っていることなどを率直に相談し、他の教員もサポートティブに接しているのが印象的だった。相談の際にも、たとえばAという学生に攻撃されており、次回授業に行くのが不安だ、などというネガティブな気持ちもそのまま表現され、それを他の教員が丁寧に聞き、サポートするという非常にPerson-centred的なミーティングであり、教員のピアサポートのありようとして学ぶところが多かった。

#### IV. 研究活動

授業への参加以外では、教員による公開セミナーとして、レクチャーシリーズが開かれており、そこで3月に自分のこれまでの研究について紹介する機会を得ることができた。また3月にはメキシコで開催されたFocusing International Conferenceで口頭発表、5月にはワルシャワでのPCE Symposiumでポスター発表を行った。その他、この期間中に行った研究活動と成果は、書籍の分担執筆が3本、学会発表が2件（口頭発表1件、ポスター発表1件）、学内セミナーと講演が2件、翻訳（監訳）が1件である。内容の詳細については本誌の「活動報告」に記載している。

これらに加え、グループ・ファシリテーションのマイクロ技法を明らかにするための新たな研究に着手した。イギリスのグループ・ファシリテーション経験者へのインタビュー調査を開始し、現在も継続中である。今回のイギリス滞在中にはDr. Judy Moore (University of East Anglia) のインタビューを行った。このインタビュー調査については、ノッティンガム大学のEthic Committeeの倫理審査を受け、承認を得たが、その手続きの日本との違いなども興味深く勉強になった。

#### V. 終わりに

ノッティンガムは治安もよく、こぢんまりとした住みやすい街であった。街の中心にあるOld Market Squareには冬になるとクリスマスマーケットとスケートリンク、春先には観覧車、夏は人工の砂浜、

とイギリスならではの風景が展開された。City Centreからバスで20分ぐらいのところにはWollaton Parkという鹿もいる広々とした公園があり、さらに郊外にはAttenborough Nature Reserveという自然保護区があり、野鳥の楽園となっている。渡英して半年ほどたち、生活に少し慣れてきてからはこれらの公園まで足を伸ばして散策を楽しんだ。図6はノッティンガムの風景、図7はWollaton Park、図8はAttenborough Nature Reserveである。アジア系住民が多く、アジアスーパーが複数あって日本の食品も比較的手に入りやすい。この規模の街であってもRoyal Theatre/Concert Hallがあり、研究の合間にMathew Bourne演出のSwan Lake、クリスマス前にはメサイヤ・コンサート、佐渡裕指揮のウィーン・トーンキュンスト

ラー管弦楽団の演奏会、ミュージカルKinky Bootsなど鑑賞する機会があった。またロンドンまで足を伸ばして美術館巡りをしたり、Royal Balletの舞台を見に行ったりと、贅沢な時間を過ごすことができた。

このような機会を与えてくださった学長、学部長、そしてカリキュラム変更の忙しい時期に快く送り出してくださった心理学部の先生方とスタッフのみなさまに感謝いたします。今回の貴重な経験を、今後の教育・研究に活かしていけるよう精進いたします。

## VI. 引用文献

Rogers, C. R. & Freiberg, J. (1969). *Freedom to Learn*, Prentice Hall.



図6 Old Market Square



図7 Wollaton Park



図8 Attenborough Nature Reserve

MA Person-Centred Experiential Counselling and Psychotherapy Practice – Full-time

		Tuesday	Wednesday	Weekend Intensive	Community Meeting	
Year 1	Autumn	Core module: Developing PCE Theory XX4949 Stephen Joseph & David Murphy (30 credits) (45 hrs)	Developing PCE Professional Practice and Skills XX4950 Sue Price (30 Credits) (45 hrs)	November Encounter Group Weekend (15 hrs)	Start and end of semester Community meeting (4 hrs each)	Personal Therapy (20hrs)
	Spring	Core module: Advancing PCE Theory XX4951 Stephen Joseph & David Murphy (30 Credits) (45 hrs)	Advancing PCE Professional Practice and Skills XX4952 Sue Price (30 Credits) (45 hrs)	March Encounter Group Weekend (15 hrs)	Start and end of semester Community meeting (4 hrs each)	Personal Therapy (20hrs)
Year 2	Autumn & Spring	AAL Specialist Module: Power, politics and social cultural world Max Biddulph (60 Credits) (90 hrs)	Research Methods, Dissertation David Murphy & Stephen Joseph (60 Credits) (90 hrs)	November Encounter Group Weekend (15 hrs)	Start and end of semester Community meeting (4 hrs each)	Placement (50hrs), supervision & Personal Therapy (20hrs)
	Autumn & Spring	CYP Specialist Module: CYP in context Sue Price (60 Credits) (90 hrs)		March Encounter Group Weekend (15 hrs)	Start and end of semester Community meeting (4 hrs each)	Placement (50hrs), supervision & Personal Therapy (20hrs)

Minimum 30 hours  
Learner-Centred Enrichment programme (Non-credit bearing Module)  
David Murphy